学　　位　　名	博士（臨床心理学）	研究科 専　攻	心理学研究科
学　籍　番　号	－	氏　　名	鈴木　康明
学位論文題目	デス・エデュケーションの持つ発達援助活動的特質の検討		
審査の結果	（合格）　・　不合格		
学位授与年月日	平成 27 年 3 月 19 日		
審査委員会	【審査委員長】　手島　茂樹　教授 【審査委員】　石川　清子　教授 【審査委員】　鶴　光代　教授		

《論文審査の結果の要旨》

本論文は、学校教育においてデス・エデュケーションを発達援助活動として位置づける構想のもと、その発達援助としての有用性を検討しようとしたものである。

本論文は４部の構成となっており、第 1 部では、文献から我が国におけるデス・エデュケーションの現状についてまとめ、教育場面ではこれまでデス・エディケーションの一つとしての死と悲嘆のテーマはあまり馴染みのないものであったとしている。しかし、この導入により、児童・生徒達に深く生きる意味を学ぶ素材となりうるとし、今後のあるべき課題として考察している。

第 2 部では、この考察を受けて、大学での筆者のデス・エデュケーションに関する授業の受講生を対象として、その有用性に関する実証的研究を試みている。「講義について自由に意見、感想をまとめてください」という教示のもと、膨大な生データーを収集し、KJ 法並びに筆者独自の工夫を加え、まとめている。その結果、受講生達に、自己探求の過程が生じ、刹那的でない生き方への志向性が促進され、自助力を形成していく崩芽がみられたという。この変化は発達の証であり、デス・エデュケーションは発達援助活動として有効であると考えられるとしている。この第 2 部の研究は、発想がユニークであり、実証性も高い研究となっている。

第 3 部では、続いて小学校、中学校、高等学校でデス・エデュケーションを行っている 6 名の教員を対象として、その授業内容並びに生徒・教師に生じたことについて半構造化面接を行い、その結果をまとめている。その結果、小学校、中学校、高等学校では馴染みにくいとされてきた死と悲嘆の課題に関しても、真剣に取り組み、核心に触れていく姿が浮き彫りにされている。このことから、この授業の有用性も明らかにされ、貴重な研究となっている。

第 4 部は総合考察である。デス・エデュケーションが、人がより良く生きる上で重要な示唆を与えることを明らかにした本研究は、臨床心理学の発展および臨床心理士の実践の拡大に貢献するものと言え、博士（臨床心理学）論文として十分に値するものと判断された。